

令和4年度 第2回

川口市農政審議会

会 議 資 料

川口市経済部

## 議題 1

### 第 2 次川口市農業基本計画（川口市都市農業振興計画）について

- (1) 中間報告について \_\_\_\_\_ 1
- (2) 川口市農業をとりまく状況の整理及び  
重視すべき取組について \_\_\_\_\_ 1

## 議題1 第2次川口市農業基本計画（川口市都市農業振興計画）について

### （1）中間報告について

令和5年度から令和14年度を計画期間とする「第2次川口市農業基本計画（川口市都市農業振興計画）」について、計画策定委託事業者を選定し、策定作業を進めているところであり、その中間報告については「別紙1」のとおりである。

### （2）計画策定に向けた課題認識と施策の方向性について

「第2次川口市農業基本計画（川口市都市農業振興計画）」の策定にあたり、本市農業をとりまく状況の整理及び重視すべき取組について検討する。（参照「別紙2」）

## 中間報告について

### 統計データからみる川口市農業の現況

- 川口市総人口・総世帯数は増加傾向ですが、農家戸数、経営耕地面積はともに減少しています。
- 農業経営者のうち 60 歳以上が 78%であり、担い手の高齢化が進んでいます。
- 市内農業生産の大部分は、植木や花き等の緑化産業、野菜（露地）が占めています。
- 農産物の出荷先は、卸売市場（約 4 割）、小売業者（3 割弱）、消費者への直接販売（約 1 割）が多くなっています。

[参考データ]

1 本市農業の基本指標（推移）

○総農家は640戸（販売農家341戸、自給的農家299戸）です。この20年間では、販売農家は約59%減少した一方で、自給的農家は約26%増加しています。

○経営耕地面積は389haで、この20年間で約35%減少しています。

		平成12年 (2000年)	平成17年 (2005年)	平成22年 (2010年)	平成27年 (2015年)	令和2年 (2020年)
総人口	人	460,027	480,079	500,598	578,112	594,274
	[指数]	[100]	[104]	[109]	[126]	[129]
65歳以上の人口 総人口に占める割合	人	55,875	74,801	94,675	129,410	137,923
	[%]	[12.1%]	[15.6%]	[18.9%]	[22.4%]	[23.2%]
総世帯数	戸	179,023	193,641	209,534	245,830	267,141
	[指数]	[100]	[108]	[117]	[137]	[149]
総農家	戸	1,065	1,051	1,008	865	640
	[指数]	[100]	[99]	[95]	[81]	[60]
販売農家	戸	828	669	595	482	341
	[指数]	[100]	[81]	[72]	[58]	[41]
自給的農家	戸	237	382	413	383	299
	[指数]	[100]	[161]	[174]	[162]	[126]
農業経営体	戸		702	619	522	387
	[指数]		[100]	[88]	[74]	[55]
経営耕地面積 ※1	ha	602	507	457	403	389
	[指数]	[100]	[84]	[76]	[67]	[65]
1戸（1経営体）あたりの 経営耕地面積 ※2	ha	0.7	0.7	0.7	0.8	1.0
	[指数]	[100]	[99]	[102]	[106]	[138]

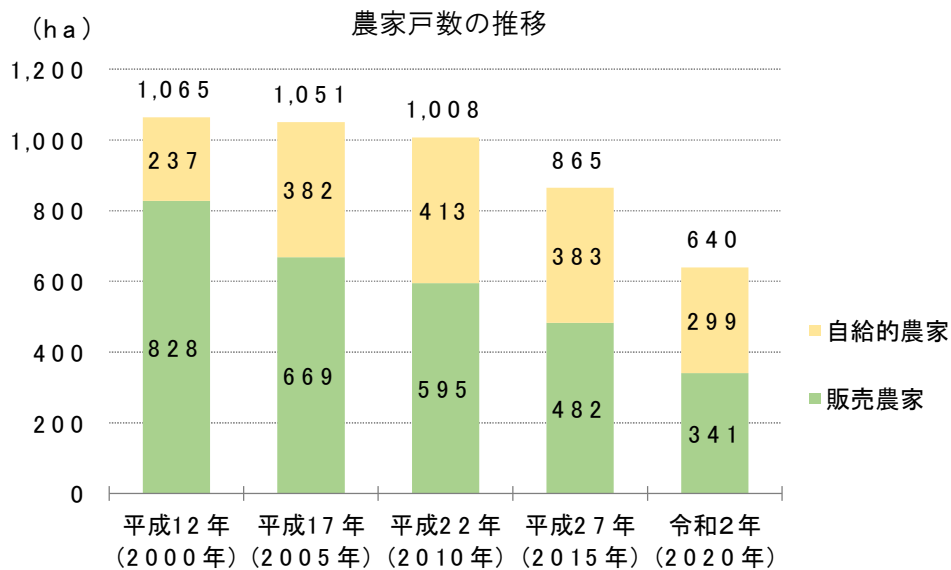
※1：2000年は販売農家、その他は農業経営体の数値

※2：2000年は販売農家1戸あたり、その他は農業経営体1経営体あたりの数値

出典：国勢調査、農林業センサス

●用語解説

- ・販売農家：経営耕地面積が30a以上又は農産物販売金額が50万円以上の農家
- ・自給的農家：経営耕地面積が30a未満かつ農産物販売金額が50万円未満の農家
- ・農業経営体：経営耕地面積が30a以上の規模の農業、又は農作物の作付面積・栽培面積が定められた基準以上の農業、または農作業の受託事業を行うもの

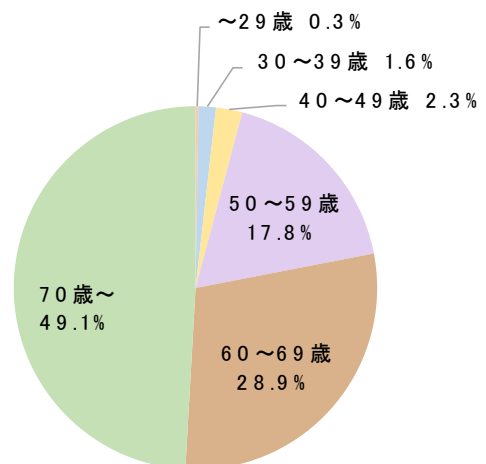


出典：農林業センサス

## 2 担い手の状況

### (1) 農業経営体の年代

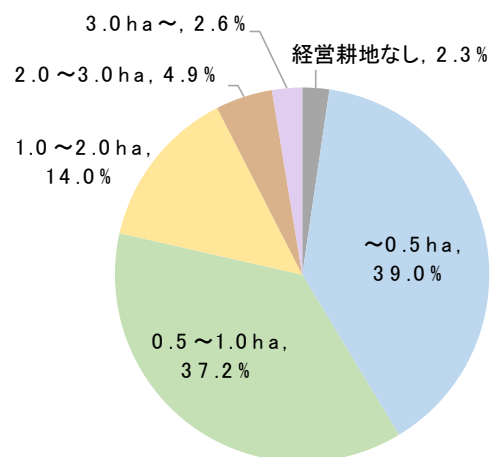
○農業経営体 (387 戸) のうち、約半分の割合を 70 歳以上が占め、60 歳以上は約 78% となっています。



出典：2020 年農林業センサス

### (2) 農業経営体の経営耕地面積

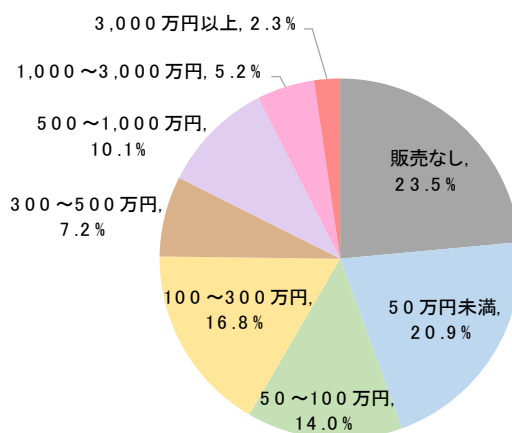
○農業経営体数 (387 戸) を経営耕地面積別にみると、「0.5ha 未満」が最も多く約 39% (151 戸)、次いで、「0.5～1.0ha」が約 37% (145 戸) を占めており、面積規模が小さい農業経営体が多くなっています。



出典：2020 年農林業センサス

### (3) 農業経営体の販売金額

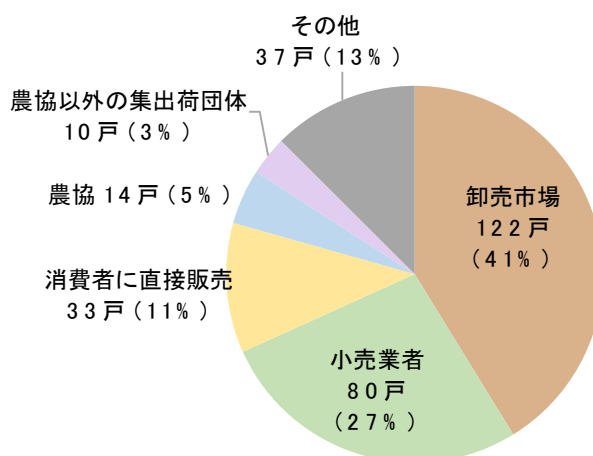
- 農業経営体（387 戸）のうち、販売金額が「500 万円以上」の農業経営体は約 18%（68 戸）あります。
- 一方、「販売なし」が約 24%（91 戸）、「50 万円未満」が約 21%（80 戸）であり、全体としては小規模な経営体が多くなっています。



出典：2020 年農林業センサス

### ■農産物の出荷先

- 販売実績がある農業経営体(296 戸)について、農産物の出荷先（売上 1 位の出荷先）は、「卸売市場」が約 41%（122 戸）、小売業者が約 27%（80 戸）、消費者への直接販売が約 11%（33 戸）などと続いています。



出典：2020 年農林業センサス

## 川口市農業基本計画ヒアリング調査結果概要

日時：2022年6月22日、23日、7月7日

対象者：川口市農業青年会議所及び農業者

参加者：川口市農政課・株式会社地域計画建築研究所（アルパック）

問：川口市の農業が発展していくために必要なことは？

### ◆安定収入の確保

- ・ 相続の際に農業を辞めるケースが多い。生産物の単価が安く、収入が少ないので、会社に勤めた方がよいと考える人が多いように思う。
- ・ 飲食店と直接取引をしても、個人店ではそこまで量を必要とされない。農家としては一定量を納品したい。
- ・ 果物は野菜に比べて利幅が大きく、自分で値決めができる。ただ、経費がかさむため、始めてから数年間は利益が確保できないことが悩みである。
- ・ 農業の不安定な面をバックアップする仕組みが必要だと思う。例えば、資材・肥料・燃料の高騰対策、自然災害への補償などがあるとよい。
- ・ 距離的に消費者が近いため、直売で売れる。

### ◆相続問題

- ・ 農地を残したいと思っても、相続税が路線価で計算され、多大な相続税がかかるため、農地を売らないと税金が払えない。相続が発生して気力がなくなってしまうこともある。
- ・ 都市農地貸借法（都市農地の貸借の円滑化に関する法律）など、農地法とは異なり、契約期間経過後には農地が返ってくる貸し借りの制度があることを知らない方が多い。

### ◆人手・後継者の確保

- ・ 後継者不足、高齢化はどここの農家も問題となっている。若手（20～30代）の生産者はほとんどいない。
- ・ 人手が足りないが、人を雇用できない場合はそれに見合った生産体制にするしかない。

### ◆販路の確保・拡大

- ・ 植木の売り上げは今のところ確保できている。ただし、植木の流行りが毎年のように変わるため、植木生産は博打的な側面もある。



- ・ マンション開発業者やハウスメーカー等が提携している植木農家は決まっており、新たに参入するのは難しい。
- ・ 5～6人のグループでオリジナル商品の育種に取り組んでいる。
- ・ 情報発信手段としてのYouTubeやSNSの講習会があれば参加したい。
- ・ 商品だけ持っていかれて代金が入っていないということがあったため、無人販売は難しいと感じている。ロッカー型販売機の導入補助や、リースなどがあるとよいと思う。

#### ◆営農の拡大

- ・ 市内の農地で植木を生産される方は少なくなってきており、茨城や千葉に農地を持っている人が多い。規模拡大をめざすなら、より広い農地を取得できる場所を選ぶだろう。
- ・ 畑を広げたい人はいるが、賃貸料、距離の問題などで難しい。

#### ◆認定農業者への支援等

- ・ 認定農業者の助成金が出にくい、審査が長いと感じる。助成金のルールを分かりやすくするなどの改善が必要だと思う。
- ・ 新たに農地を借りたが、しばらく休耕地だったため、土壌改良から着手した。こうした取組に少しでも金銭的な支援があるとよい。川口市は土壌改良の補助がなく、補助があると農家はとても助かると思う。

#### ◆付加価値のある農業

- ・ 農産物を作って販売するだけでは、経営は厳しい。天候に左右されるため、栽培したものに付加価値をつけて販売していかないと長続きしない。
- ・ オンライン販売や講習会などを行い、新たな顧客の獲得を目指すなどの取組が必要だと思う。
- ・ コロナ禍のなか、講習会や園芸の需要は高まっていると感じる。

#### ◆川口農業ブランド

- ・ 川口農業ブランドの認定を受けることによって、信用が高まったり、露出が多くなったりするのは助かっている。品質低下を防ぐために、自分で基準を設けてブランド品として販売している。
- ・ 野菜や果樹は、ある程度の人数が集まって生産量を増やして、地域ブランドとして売っていくのがよいのではないかと思うが、消費地に近いためか、あまりグループで一緒に作っていくという感覚がないかもしれない。グループになれば、県の新品種を導入が可能になったり、県の農業技術研究センター等からの指導も受けやすくなるし、農家同士で情報交換もできる。

- ・ 川口農業ブランドとして認定されたものをどのようにPRしていくかがこれからの課題ではないか。安行の直売所は、他市の農家も入っているため、川口農業ブランドを大々的にPRできないと聞く。また、川口は農地面積が狭いので、需要が大きくなりすぎると量の確保ができるのかが心配である。
- ・ JAさいたまの総代会で、JAさいたまブランドの農産物を作ってほしいという声があった。草加市ではロマネスコを売り込もうとしている。JAが関わるイベントが多くあったり、JAを通じて他市・他県へ販売できたりするので、売り込むチャンスは市よりもJAの方があるかもしれない。

#### ◆海外展開の可能性

- ・ 輸出は、土・根があるため、検疫などの面で難しい。単価が高くないと採算がとれない。

問：「農」×●●の取組やプロジェクトの可能性は？

#### ◆「農」×体験

- ・ 収穫体験など、農業体験は一定のニーズがあるように思う。
- ・ 地域周遊型の体験となると、都内から近い立地は有利だが、それぞれの農園や店舗を繋ぐ交通の便があまりよくないことが問題である。
- ・ おしゃれな園芸店が流行っているが、メディアにのれば、話題性が出る。こういった緑の空間をつくることはできると思うので、異業種とも連携し、植え付け・寄せ植え体験教室などの展開はできるかもしれない。
- ・ 体験イベントを開催しようとする、食中毒対応や食品衛生法関係の手続きなどが必要となるが、それを知らない人も多く、農協の保険で対応できることなど情報提供が必要。

#### ◆「農」×まちづくり

- ・ あじさいをはじめ、安行の名前がついた植物が多くある。安行由来の植物を使って街路樹植栽を作れば、川口を活かした街並みができて良いと思う。街路樹が難しいようなら、商店街の花壇などでもできるかもしれない。
- ・ 東京から近い割には、植樹帯の面積が少ない。狭い植樹帯でも育つ植物は多くあるので、川口に見合った樹種選定をしたら良いと思う。時間はかかるが、川口オリジナルの良い街並み、街路樹の景観・生態系サービスを作れるのではないかな。

#### ◆「農」×レストラン・カフェ

- ・ 農家レストランは面白そうだが、1人でやるのは大変なので共同できればよいと思う。さいたま市では当番制（日替り店長制）で実施している農園もある。初期投資なども含めて、負担が少ない形であれば実施してみたい。
- ・ 市内の飲食店に食材を提供している。飲食店との連携は、店舗規模にもよるが量が少なく、農家としては、もっと多くのロットを捌きたい。

#### ◆「農」×子ども・教育

- ・ 日本は植物の名前を知っている人が少ない。近隣小学校では、社会科見学で農地に来たりするが、市内全小学校の近くに農地があるとは限らないので、農に触れられる何らかの機会があると良い。
- ・ 学校ファームのサポートをしている。子供たちは楽しんで収穫している。
- ・ 近所の保育園に畑を貸している農家もいる。

#### ◆「農」×福祉

- ・ 福祉事業所との連携は、どういう仕事ができるのかなど、お互いを知るところから始めることが必要だと思う。草むしりやポット上げなど、福祉事業所が間に入って農家の負担にならないということであれば、手を上げる人がいるかもしれない。
- ・ 園芸福祉の取組は、受け入れ先体制が整うのであれば可能ではないだろうか。実際に土や根に触ることに意味があると思う。

問：農業基本計画に期待することは？

#### ◆農業者の思い

- ・ 防災空間や緑地空間の提供といった都市農地の機能があるが、大前提として、農家にとって農地は生産する場所である。農家を無視した農業政策はしないほしい。
- ・ 農地の役割をきちんと市民に発信することが重要だと考えている。騒音や土埃などは農業をしていたら当然に発生するものであり、農地があることの良い点と悪い点の両面を伝える必要がある。
- ・ 環境に配慮した農業に取り組んでいるが、そのために周辺住民とトラブルになることがある。環境保全型農業についてのPRや、農家への助成をお願いしたい。
- ・ 都市農地は残すべきものだと考える。農地を残し、農業をやりやすい環境をつくってほしい。

#### ◆市民の理解・市民との交流

- ・ 農家は以前から変わらないのだが、後から移住してきた市民には農地や農作業について理解されないように思う。農業の現状や事情など、広く市民に関心を持ってもらいたい。そのためには農家からも歩み寄って、周辺住民と交流することも必要だと思う。
- ・ 農業の楽しさを伝え、体験してもらって、同時に大変さも伝えられたらよいと思う。農業は体験しないと伝わらない。百聞は一見にしかずだと思う。

## 第2次川口市農業基本計画（川口市都市農業振興計画） 今後のスケジュール

- 1 農業関係団体等の意見聴取の実施（7月から9月）
  
- 2 農政審議会等
  - (1) 第3回農政審議会
    - ① 計画素案策定
    - ② 第2次計画の重点施策等
    - ③ 計画の推進について
  - (2) 第4回農政審議会
    - ① 計画（案）のとりまとめ
    - ② 計画策定後の取り組みについて
  
- 3 パブリックコメントの実施（12月予定）
  
- 4 第2次川口市農業基本計画策定（令和5年3月）

## 川口市農業をとりまく状況の整理

現時点での川口市農業を取り巻く状況について、「強み」、「弱み」、「機会」、「脅威」の視点から整理します。

強み (Strength)	弱み (Weakness)
<p><b>● 植木・花きを中心に、ブランド力のある農産品</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 緑化技術は、国際園芸博覧会に出展するなど、海外でも高く評価されている</li> <li>・ 「ぼうふう」は、京浜市場で90%以上のシェアを占める</li> </ul> <p><b>● 市民が思う「川口の魅力」として川口農業が貢献</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「都市農業が行われている」、「豊かな水と緑に親しめる」と感じている市民が約50%</li> <li>・ 市民が好きな場所1位は「グリーンセンター」</li> </ul> <p>※ 市民意識調査結果より</p> <p><b>● 川口農業を活かした、多分野・異業種との連携など、新しい取組がはじまっている</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市役所でのマルシェの毎月開催</li> <li>・ 「新井宿駅と地域まちづくり協議会」の取組として夏みかんでまちおこし (川口・神根地区の農家×地元和菓子店)</li> <li>・ “緑の郷”安行オープンガーデンを20年以上実施</li> <li>・ 「ビールのまち、川口」の復活へクラフトビールづくり</li> <li>・ 「イイナパーク川口」、「川口ハイウェイオアシス」が開園し、新たな賑わいと地域振興の拠点となっている</li> </ul>	<p><b>● 都市化・宅地化による営農環境の悪化、相続税の対応など、営農継続の難しさが増している</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 農家戸数が減少</li> <li>・ 農家人口率は1%以下</li> <li>・ 農地の細分化による生産力の低下、農薬散布や落葉に対して寄せられる周辺住民からの苦情が増加している</li> <li>・ 農地の減少と耕作放棄地の増加（後継・相続時等の対応等）</li> </ul> <p><b>● コロナ禍による影響をはじめ、とりまく環境の厳しさが増している</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 川口市営植物取引センターで開催されるせり取引の売上高が減少している</li> <li>・ コロナ禍、燃料や資材費の高騰による経営圧迫、ニーズやライフスタイルの多様化など、マーケットニーズが把握しづらい</li> </ul> <p><b>● 新たな動きが点でとどまっている</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市民の「都市農業の充実」に係るニーズは低い</li> <li>・ 「取組が線となる」などの拡がりが十分でない</li> <li>・ 「川口農業ブランド」のさらなる確立・促進</li> </ul>
機会 (Opportunity)	脅威 (Threat)
<p><b>● 「選ばれるまち 川口」として人口増加</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 住宅ローン会社が選ぶ「本当に住みやすい街大賞（首都圏）」で、JR川口駅周辺が2年連続グランプリを受賞</li> <li>・ 近年は転入増が継続している</li> </ul> <p><b>● 「花き」、「農」の新たな需要が生まれつつある</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市内には飲食、食関連製造業、観光など、関連事業者が多くあり、農商工連携、農業参入など、他産業からの川口農業への注目</li> <li>・ 「新たな花き産業及び花きの文化の振興に関する基本方針」の改定（令和2年）、国として花き輸出を促進する動き</li> <li>・ 2027年横浜国際園芸博覧会の開催</li> <li>・ 自宅での花や観葉植物のニーズの高まり</li> <li>・ 農への関心層の増加 (女性、若者、リタイア層等、農福連携など)</li> <li>・ 都市農地の流動化の進展 (都市農地貸借円滑化法)</li> <li>・ SDGs、障害者雇用促進法、気候変動対策、みどりの食料戦略システム</li> </ul> <p><b>● 情報発信の簡易化、技術革新、生産性向上</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スマート農業やデジタルテクノロジーの進展</li> </ul>	<p><b>● 気候変動、エネルギー問題、海外経済情勢の影響</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ TPPやEPA等による国際競争の激化</li> <li>・ 燃油価格の高騰</li> <li>・ 気候変動（温暖化等）による農作物への影響</li> <li>・ 国の農政の変化の早さ</li> </ul> <p><b>● 国内の人口構造の変化と世界的な食糧不足の懸念の高まり</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 世界の人口増加、経済発展による食生活の変化の一方で、異常気象等による食糧不足の懸念</li> <li>・ 少子高齢化の進展、単身世帯の増加、女性の社会進出などにより食生活が変化</li> <li>・ 戦争による経済の停滞（ウクライナ情勢）</li> </ul> <p><b>● 変化する暮らしと厳しさを増す自治体経営</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「花を飾る、庭がある家」などの減少</li> <li>・ 所得格差の拡大、生活課題の複雑化・複合化の進行</li> <li>・ 自治体財政の厳しさが増大</li> <li>・ 地域課題が高度化する中で行政職員の減少</li> </ul>

【内部環境】

【外部環境】